

# 健康、家族も二の次に

焼酎を初めて口にしたのは20歳の時だった。民間企業の営業職に就き、初日に開かれた歓迎会。場の雰囲気を壊さぬように体に流し込んだが、独特の臭いを受け付けず、トイレで嘔吐(おうと)した。「もう飲みたくない」。そう思っていた。

宮崎市に住むアルコール依存症の裕次さん(54)は、社会人になってから酒を覚えた。忘年会や新年会、暑氣払い…。会話が弾み、笑顔が広がる飲み会の雰囲気が好きになった。苦手だった芋焼酎もい香りと感じ始め、気が付けば自分から同僚らを誘うようになっていた。

酒を飲む理由が「憂さ晴らし」になったのは、2度転職して40代で別の営業職に就いた頃から。成績が伸びず、上司から「何をしている」と責められた。帰宅すると自然と焼酎に手が伸び、グラスを重ねて気持ちを落ち着かせた。

さらに睡眠薬代わりに飲み、浅い眠りから目覚めれば再びコップに酒を注ぐ。

酒が切れると手が震え、昼間も日報が書けない状態に。悪循環に陥り、グググを告げられたが、「これ为好きに酒が飲める」と思っ自分もいた。

それからは家にこもり、寝る時間以外は酒をおおった。妻と子ども1人の家族のことや、自分の健康も二の次に。入浴や食事を取る意思もなく、胃に激痛を感じても「血を吐いて死んでもいいと思った」。妻に精神科の受診を勧められても拒絶。立てなくなるまで酒を手放せなかった。

酒が切れると手が震え、昼間も日報が書けない状態に。悪循環に陥り、グググを告げられたが、「これ为好きに酒が飲める」と思っ自分もいた。

それからは家にこもり、寝る時間以外は酒をおおった。妻と子ども1人の家族のことや、自分の健康も二の次に。入浴や食事を取る意思もなく、胃に激痛を感じても「血を吐いて死んでもいいと思った」。妻に精神科の受診を勧められても拒絶。立てなくなるまで酒を手放せなかった。

それからは家にこもり、寝る時間以外は酒をおおった。妻と子ども1人の家族のことや、自分の健康も二の次に。入浴や食事を取る意思もなく、胃に激痛を感じても「血を吐いて死んでもいいと思った」。妻に精神科の受診を勧められても拒絶。立てなくなるまで酒を手放せなかった。

それからは家にこもり、寝る時間以外は酒をおおった。妻と子ども1人の家族のことや、自分の健康も二の次に。入浴や食事を取る意思もなく、胃に激痛を感じても「血を吐いて死んでもいいと思った」。妻に精神科の受診を勧められても拒絶。立てなくなるまで酒を手放せなかった。

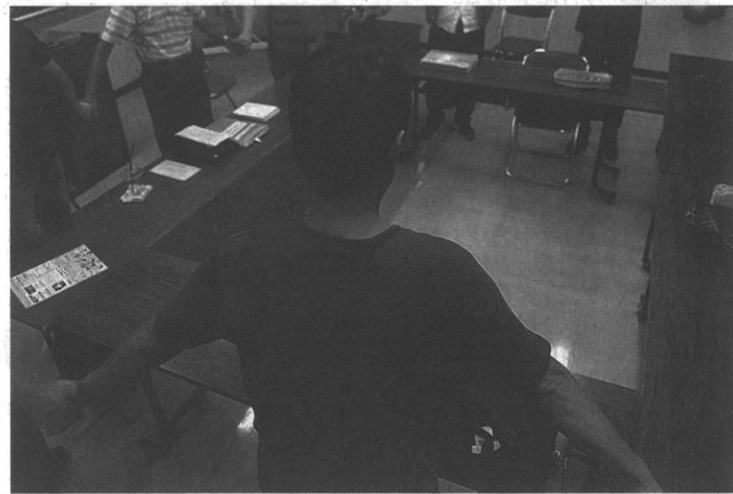
それからは家にこもり、寝る時間以外は酒をおおった。妻と子ども1人の家族のことや、自分の健康も二の次に。入浴や食事を取る意思もなく、胃に激痛を感じても「血を吐いて死んでもいいと思った」。妻に精神科の受診を勧められても拒絶。立てなくなるまで酒を手放せなかった。

が付き、以前と同じ酒量では充足感が得られなくなる。体内にアルコールが入った状態が普通になり、発汗や震えを抑えるため、意思に反して酒を飲む。場合によっては肝硬変や心筋

梗塞などになる恐れもある。厚生労働省研究班による推計(2013年)では、アルコール依存症経験者は全国で109万人に上るが、治療中はわずか8万人。県内でもアルコールに関する相談が相次いでおり、県障がい福祉課によると県の保健所に電話や面接などで272件(14年度)。

裕次さんは医療機関に4カ月ほど入院したが、酒をやめられなかった。その後、自助グループに入り2年半以上断っているが、グラスを合わせる乾杯の音やネオンの明かりを見聞きするたびに欲求が爆発しそうになる。「明日は飲酒しているかもしれない」。そんな思いを抱えながら飲まない一日を積み重ねてい

る。



参加者ら自助グループが開いた会合。裕次さんと手をつなぎ、断酒の誓いを新たにしている宮崎市内の公民館(横山侑季撮影)